

論文

## 認知資本主義での労働と消費の併合によるイヴァン・イリイチのシャドウ・ワークの再評価

安田 智博\*

### はじめに

本稿では、シャドウ・ワーク (shadow work) が認知資本主義において担っている役割が、産業社会におけるそれとは異なっていることを明らかにしていく。そのために、イヴァン・イリイチ<sup>1</sup>によるシャドウ・ワーク論を振り返りつつ、先行研究について批判的に検討していく。そして、シャドウ・ワークが認知資本主義における労働と生活の同一化で果している役割を検討していく。その過程で、イリイチを参照しながら、ヴァナキュラー的なものとセンチメンタリズムが、認知資本主義社会におけるシャドウ・ワークの新たな特徴であることを明らかにする。

### 1. シャドウ・ワーク (論) の変化

イリイチは、その産業社会批判において、産業社会にはある種の「分水界」ないし「限界閾値」が内在しているとしていた。イリイチによるなら、産業社会ではその「限界閾値」を超えてしまうことによって「逆生産性」を生ずる。この逆生産性とは、産業社会の発展を構成する学校化、病院化、交通拡大が進めば進むほど、それに対する反動として生ずる非効率的な弊害のことである<sup>2</sup>。イリイチによるなら、産業社会は、生産労働が賃金労働になり、それが生み出す商品が生活に必要不可欠となる社会である。そのような社会では経済の拡張が人々の生活を豊かにするものとして受け取られているが、過剰な生産労働による過剰な商品の浸透が限界閾値を超えるなら、効率性や利便性の向上ではなく逆に種々の弊害を引き起こしていく。その弊害を消費の面から捉えるなら、次のようになる。

産業社会が商品の生産と販売を続けるためには、消費者の経済状況を向上させるだけでなく、消費者の購買意欲がそられるように商品に新たに価値付与することが不可欠となる。そして、消費者が商品への依存度を高め、商品の消費が重要であると思込むことが不可欠となる。このような生産と消費の体制が続くためには、限界閾値を超えても逆生産性を生じさせないようにする必要がある。イリイチによれば、その役割を果たすのがシャドウ・ワークなのである。

シャドウ・ワークとは、貨幣価値には換算されない活動であるが、産業社会では、商品の生産を補足する不可欠な「労働」、賃金労働を補完する不可欠な「労働」となる活動のことである。イリイチによるなら、産業社会では、そのような活動が、「商品の世界と矛盾するものではなく、操作と管理と官僚的開発が可能となる領域へと登場する」(Illich 1981: 30)。そのとき、賃金労働とシャドウ・ワークは、産業社会における光の領域と影の領域を構成する。そして、両者が共働することによって、「明るく照明された領域では、産業的生産の増大につれて、労働、価格、ニーズ、市場がますます管理されてくるが、〈影の領域〉はこの領域のあとを追って、これに対応する活動を全面的に展開していく」(Illich 1981: 30)。光と影は不可分であり、光の拡大は影の拡大と不可分である。では、そのシャドウ・ワークは具体的にはどのように展開し拡大するのであろうか。

当初のイリイチは、シャドウ・ワークを次のように大別していた。一つが、家庭で行われる家事、育児、介護などである。もう一つは、社会の状況に組み込まれ強要される通勤、通学、受験勉強、さらに仕事のための準備など

---

キーワード：イヴァン・イリイチ、シャドウ・ワーク、認知資本主義、センチメンタリズム、ヴァナキュラー的なもの

\*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 生命領域

である。イリイチが、とくに前者が女性に大きな負荷を課すとして、シャドウ・ワーク論の中心に据えていたことは後の議論の方向を制約することにもなった。ところで、イリイチは、シャドウ・ワークが産業社会で突然に誕生したものと捉えてはいなかった。近代以前の経済はコミュニティに根づいたものであったが、近代化によって経済はそこから市場経済として離床 (disembed) し、近代では経済の中に人間生活や社会関係が見いだされるとしたカール・ポランニー (Polanyi 1944=1975) の影響を受けて、イリイチは、近代以前の何かが産業社会のシャドウ・ワークへと離床したとする見方を示唆していたのである。このようなシャドウ・ワーク論の背景もまた、後の議論の方向を決定づけることにもなった。それについて、本稿に關係する限りで簡単に検討しておく。

山本哲士は、「理論対象」と「現実対象」を区分し、シャドウ・ワークは前者に属するが、後者にあたる実体的なものを分析する上で、シャドウ・ワーク論を介することが重要だとしていた (山本 2009: 244-245)。山本は、シャドウ・ワークが現実を構成するものとは見なさなかつただけでなく、理論対象たるシャドウ・ワークと現実対象たる商品生産労働そのものや家事労働そのものとの關係を詳述してはいなかった。片岡公博や栗原彬は、シャドウ・ワークとコンヴィヴィアリティ (conviviality) を完全に分離し、産業社会でのシャドウ・ワークを本来の生活からの逸脱としてのみ捉えていた。そして、彼らの主要な関心は、産業社会のオルタナティブとしてのコンヴィヴィアルなコモンズに向けられることになった (片岡 2005; 栗原 2005)。そのため、離床の有り様を検討する視点を失ったのである。上野千鶴子は、イリイチが性別に中立的=中性的な形で一般化してもいたシャドウ・ワーク論に対して、女性の家事や育児といった生を育む活動の重要性を見落としていると批判していた。さらに上野は、イリイチのように近代以前のサブシステンス (subsistence) <sup>4</sup>の系譜にあるものとして近代の家事労働を肯定的に評価しようとしても、後者は前近代の女性性の役割から未だに逃れてはいないのだから、サブシステンスを理想化するのは誤りだと批判していた (上野 1986)。つまり上野は、シャドウ・ワークは前近代から離床して経済に埋め込まれているとしても、否定的なものしか受け継いでいないとして、シャドウ・ワーク論の肯定的な展開はありえないと判定したのである。また、萩原弘子は、「シャドウ・ワーク理念の拡大」によって、女性固有の問題が一般論にすり替えられることになると批判していた (萩原 1988)。萩原もまた、シャドウ・ワーク論の展開を認める態度には立っていないのである<sup>5</sup>。これらの議論はシャドウ・ワーク論の再評価に繋がるものではない。しかし、一條和夫と徳岡晃一郎によるシャドウ・ワーク論は先行研究とは異なった新たな視点を与えてくれるように思われる。

一條と徳岡は、「〈シャドウ・ワーク〉の支払われることのない自己開発が、ますます賃労働よりも重要なものになってくる」という側面に注目している (Illich 1981: 100)。そして、一條と徳岡は、「自己開発」をシャドウ・ワークに組み込むことで、否定的に見なされてきたシャドウ・ワークを肯定的に扱っているのである (一條・徳岡 2007)。この「自己開発」については、次のように述べられている。「仕事に対する内発的なコミットメント度が高く、自分がかかわっている役割や責任領域に対して問題意識や志が高い人ほど……上司の指示を待ったり、事前に相談したり、または許可を受けるようなことをせずに、自発的な非正規の行動を起こすことが多くなる」のである (一條・徳岡 2007: 27)。このような「非正規の行動」がシャドウ・ワークとして肯定的に評価されるのは、労働者のみならず組織もまた不確実性の下に立たざるをえない事情が影響しているからである。いまや組織では、個人を管理するのではなく、「ある意味では、「掟破り」を含む個人プレイに期待する度合いが高まってきている」 (一條・徳岡 2007: 29)。一條と徳岡によるなら、ポスト産業社会においては、自己開発、非正規の行動、個人プレイによって「高いパフォーマンスをもたらすような仕事の進め方に創造性を発揮すること」がシャドウ・ワークとして求められているというのである (一條・徳岡 2007: 45)。

ここまで概観してきたように、シャドウ・ワークの典型は、イリイチにあつては、通勤・通学、勉強、仕事準備、そして家事労働であった。その後、イリイチのシャドウ・ワーク論については、家事労働に限定して議論が重ねられた。さらに時を経て、シャドウ・ワークはポスト産業社会の光の領域での労働として位置づけられるようになった。この変化をどのように考えればよいであろうか。

ポスト産業社会における賃金労働そのものにシャドウ・ワークが期待されるようになった変化について、ボールドウィン (Baldwin 2012) のように、シャドウ・ワークをインフォーマル・セクターに属する労働と規定してそれを金銭的に計量化するのを試みることは、あたかもシャドウ・ワークが計量化され賃金化されてきたかのように見えることになるが、それでは変化の実相を捉え損なうであろう。ランバート (Lambert 2015) のように、シャドウ・

ワークの範囲が拡張してきた結果として賃金労働化を捉えるわけにはいかないであろう。これに対して、本稿は、一條と徳岡のシャドウ・ワーク論をより深める形で考察してみる。すなわち、イリイチ以来のシャドウ・ワーク論の変化が、産業社会でのシャドウ・ワークがポスト産業社会のそれへの変化に関係していることを明らかにしていく。

## 2. イリイチにおけるシャドウ・ワークとサブシステム

産業社会からポスト産業社会へのシャドウ・ワーク論の変化について考察していくにあたって、イリイチのシャドウ・ワーク論におけるサブシステムの位置づけに着目してみる。とくにサブシステムとシャドウ・ワークの対立関係が揺らいでいくことに着目していく。

イリイチは、シャドウ・ワークに対立するものとしてサブシステムを掲げていた。サブシステムとは、産業社会以前のコミュニティにおける独自の慣習や規範に服しながらも、自生的な創意工夫によって支えられる生存と生活を意味するが、これをイリイチは「閉じた系」とし、一種の自給自足圏と見なすとともに、コミュニティ外の他者には理解しがたい独自の文化圏をなすとも見なしていた。そして、イリイチによるなら、「コミュニティの生活は次のような前提——それは黙示的であって、しばしば儀式で表現されたり、神話的に象徴されたりする——に立脚している。すなわち、コミュニティは、肉体と同じように、みずからの規模の限界を越えて成長することはありえないという前提に立脚している」(Illich 1982: 81)。つまり、イリイチは、その土地や慣習に則った、各々の身の丈にあったサブシステムの重要性を主張していたのである。

ところで、シャドウ・ワークとは賃金の支払われない労働のことであったが、ここで注意しておくべきことが二つある。第一に、「この種の支払われない労役はサブシステムに寄与するものではない。まったく逆に、それは賃金労働とともに、サブシステムを奪いとるものである」ということである (Illich 1981: 100)。しばしば、シャドウ・ワークはサブシステムの残存と見なされるがそれは誤解であって、産業社会でのシャドウ・ワークは、それが家事労働であれ、賃金労働と手を携えて、サブシステムを掘り崩していくのである。第二に、シャドウ・ワークは不払い労働であるが、条件次第で多少の賃金が支払われて低賃金労働になりうるものではないということである。しばしば、シャドウ・ワークは本来は支払われるべき労働であると見なされてきたがそれは誤認であって、イリイチは、シャドウ・ワークが不払い労働であることを、賃金労働が成立するための条件と見なしていた。言いかえるなら、イリイチは、賃金労働が成立するために必ず前提とされる労働のことをシャドウ・ワークとして定義していたのである<sup>3</sup>。その上で、イリイチは、労働一般を賃金労働とシャドウ・ワークの二類型に分割し、産業社会では、男性が賃金労働を主に担い、女性が家事労働なるシャドウ・ワークを主に担うが、両者の間には差別的関係が存在するとして、それをアパルトヘイトとすら呼んでいた。イリイチは、次のように書いていた。

私は、なぜ産業社会においてはこうしたアパルトヘイトが避けられようもないのか、という理由を探究したい。いいかえると、希少性の仮定の上につくられる社会は、なぜ性別や肌の色、資格や人種、あるいは党派・宗派にもとづくアパルトヘイトなしには存在しえないのか、という理由を探究したい。(Illich 1981: 99)

産業社会で、女性は家庭に押し込められ、家事労働だけを割り当てられ、「奴隷制や賃金労働とも異なる独自の束縛」(Illich 1981: 100)を強いられるが、この従属化はさまざまな形で広がっていく。皮膚色、資格、人種、党派・宗派などの違いを理由とする差別による従属化も産業社会を支えるものとなっていく。そして、それぞれの従属集団に対して、不払い労働だけではなく低賃金労働も割り当てられていくことになる。そのようにして、シャドウ・ワークはさまざまな派生形へ変化し、従属集団への賃金労働の浸透と連携して、従属集団のサブシステムを掘り崩していく。

サブシステムは本来の労働によってだけでなく消費活動によっても支えられていたが、シャドウ・ワークは後者の面も掘り崩していく。産業社会では、生産労働による商品について、それを購入して所有するだけで消費が成立するわけではない。商品消費するには、買い物、調理、清掃などの活動が不可欠である。つまり、産業社会は、消費者の側の無償の労働を当てにし強いてもいる。そのようなシャドウ・ワークを行うのであれば、生存・生活

としてのサブシステムを維持することはできなくなる。この事態は、さまざまな派生形を生み出していく。例えば、通勤は、生産労働の準備のために強えられる行動であると同時に、交通機関サービスの消費でもあるが、それは交通機関サービスの成立に不可欠なことである。本来、通勤は労働のための自発的移動としてサブシステムを構成する活動であるが、産業社会での通勤は商品やサービスを供給する側によって当てにされ強えられることになる。この事情を一般化するなら、産業社会で、人々は商品やサービスの消費欲望を駆り立てられ、さまざまなシャドウ・ワークを行うことによって、生産体制を支えながらサブシステムを喪失していくということになる。

シャドウ・ワークとサブシステムは、「人間の満足＝欲求充足」を基準として見ても、対極的な関係にある (Illich 1981: 11)。イリイチは、エーリッヒ・フロムの用語を援用して、シャドウ・ワークでは「持つこと (having)」に充足が求められるのに対して、サブシステムでは「行為すること (doing)」に充足が求められるとした。そして、所有欲求に基づく社会は、「経済成長につかえる社会」であり、各人の主体的行為に基づく社会は、「共同の環境の使用が生産と消費にとってかわることに高い価値を与える社会」であるとしていた (Illich 1981: 12)。ところが、両者の対立は堅固であるかのように見えるが、いまやその関係が変わりつつあると言える。そのことを、ポスト産業社会についての認知資本主義論を通して論じていくことにする。

### 3. 認知資本主義下のシャドウ・ワーク

まず、シャドウ・ワークにも「行為すること」が含まれていることに着目してみるなら、シャドウ・ワークとして総括されてきた諸行為、すなわち、家事や育児、通勤や通学、仕事や進学のための勉強などについて、産業社会下のそれらに対するのと同様に否定的な評価を下すだけではいかな状況を見て取ることができる。一例として、料理と cookpad の関係をあげることができる。インターネットにかけられる費用を度外視しておくなら、人々は cookpad で紹介されている料理を自ら評価する。そこでは、人々は cookpad の情報を受動的に消費するというよりは、いわば cookpad の情報に価値付与を行う無償のサービスとして能動的に消費している。それだけではなく、人々は自ら作った料理を紹介して他者の評価を受けることによって、いわば cookpad をサービスとして無償で生産している。そこには、産業社会下の商品の生産と消費とは異なる、サービスの生産と消費が生まれている。それだけではなく、そこには過去のサブシステムとは異なるものの、サブシステムの一部を支えるある種のコミュニティが生まれている。このようなコミュニティが蘇生していることについては、情報社会論などで繰り返し指摘されてきた。その代表例は、さまざまな SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) である。そこでは、生産労働とも賃金労働とも区別される諸行為が営まれている。そして、何も生産せず不毛であったはずの時間が、何かを生産し消費するかのようにして有効に活用されている。そこでは、情報の交換や共有を介して、何らかの価値創造が行われ、既存の階級や身分に拘らない新たな繋がりが顕在化している。このような変化は、シャドウ・ワークそのものが変わっていることを示唆しているのではないだろうか。この点で参照されるべきは、ネグリとハートの非物質的労働という概念である (Negri and Hardt 2000)。

産業社会における労働とは、テイラー主義に基づいた労働の細分化・標準化・専門化の推進から構成された労働形態であり、労働者が熟練労働や頭脳労働から排除されることで促進された技術進歩に基づく労働であり、さらには管理者が労働の知見を独占することによって可能になった労働形態である。大量生産と分業制に重きを置いた労働モデルは、フォード社の代表であるヘンリー・フォードになぞらえてフォードイズムとよばれた。フォードイズムの一般化によって、企業は作業の合理化や効率化と労働者の管理と、さらに生産性の向上を賃金に還元し、労働者の完全雇用と消費の拡大へと拡げることで、技術進歩と経済成長に貢献していく。したがって、労働者は人員として作業場所に配置され、労働時間中は作業以外の身体活動については、制限をかけられることとなる (Lipietz 1989)。そして、大規模な市場で大量の商品の交換が産業社会では行われていたのである。しかし、過剰な生産性によって、市場が飽和状態となることで、フォードイズムは生産や消費の価値付与の限界に突き当たる。

そして、情報通信技術産業の発展と普及によって、建造物や物的商品に基づいた物質的労働から、コミュニケーションとネットワークに基づいた非物質的労働へと転換したのである (Negri and Hardt 2000)。また、消費に関する性向もコミュニケーションとネットワークに基づいていることから、消費者の情動的反応は非物質的生産物の売れ行

きに影響を与える。このような消費の変化が起こりえたのは、フォーディズムが「戦後資本主義における生産力の増大こそが、情報の通信技術の発展と普及を可能にした」のであり、そのプロセスを経たことで、情報の拡散、及び情報の双方向の経路、かつそれを可能にするフラットな環境が整ったからである（山本 2016b: 66）。このことから山本泰三は、情報技術の発展は作業の時間短縮によるのではなく、多方に錯綜するノマド的なりゾームモデルのネットワークによるフレキシブルな主体性によるという（山本 2016b）。したがって、情報ネットワーク環境や高性能な小型情報端末、そしてその教育が大衆にも広く行き届く状況下で、労働者は企業による束縛から解放され、自立的で多様性に基づいた労働が可能になったのである（山本 2016b）。

そして、コミュニケーションを円滑に行うためのフレキシブルな主体性がポスト産業社会では重要となる。この主体性についてクリスティアン・マラッツィは、消費者の情動的反応に対応できるということは、つまるところ他者への配慮や気遣いが身体化していることだとしている（Marazzi 1999=2009）。また、アンドレア・フマガリは、生産と消費は分かちがたく結合しており、労働と消費の間に分離はないとしている（Fumagalli 2010）。他方で、フレキシブルな主体性とは、常に業務が安定的に遂行されるわけではないという意味でもある。労働者にとってフレキシブルな主体性は雇用形態の変容へと繋がっていく。これを企業からみればネットワークとは、大企業を軸とし、中小企業を網羅することに他ならない。もちろん経営戦略によって多少は異なるが、重要なのは「ここでいうネットワークはつねに変形されるもの」であるため、「延長され、分離され、組み替えられる」ということだ（山本 2016b: 68）。したがって、雇用形態や組織構造もまた、常に変形せざるをえないため、企業にとっても労働者にとっても、社会変化に対する即応的な反応や流動性、不安定性を常に内包していることになる。そのため、大企業からすれば業務内容に応じて、下請け企業にアウトソーシングすることになるし、労働者からすれば給与体系や雇用関係に応じて、いっそう個人事業主化していくのである。この変化についてマウリツィオ・ラツァラートは、労働の多様性のため様々な労働モデルを「明確に区別することのできないものとなり、様々に混ざり合った」ことによって、労働者階級の意義が問えなくなったとしている（Lazzarato 2004=2008: 301）。

このことから、認知資本主義には二つの特徴がある。第一に、労働の自由や能力重視の社会という特徴である。第二に、労働者が個人事業主として能力や知識を元手に企業と契約を結ぶこととなり、労働者階級による連帯が実現できず、不安定な雇用を強いられるという特徴である。そして、労働者にとっては、商品やサービスへの情動的反応を惹起させることが重要となる。そのなかで、消費に基づいた生活が労働という側面としても表れてくるのである。無償でサービスを生産している cookpad や SNS は、消費者にとって他者から評価されるために消費を行うという逆転現象が起こっている。このとき、シャドウ・ワークが他者からの評価で形成されたコミュニティを築いているのである。シャドウ・ワークには消費を行うことによって、新たな希求が生じることは既に言及した。その上で、イリイチはシャドウ・ワーク化した社会について、次のように述べている。

今日という時代の、ジェンダーなき、所有欲ある個人という、経済の主体は、限界効用の考慮に立脚する諸決定によって生活している。すべての経済決定は、希少性＝欠如性の意識のなかに埋め込まれており、したがって過去には知ることのなかった一種の羨望・ねたみへの方向をとっている。同時にまた現代の生産的諸制度は、ねたみ心を起こさせる個人主義を熟成し、その仮面でおおっている。それはとりも直さず、過去のすべての時代にあったサブシステム志向の諸制度が減じるようにつくられた何ものかにはほかならない。（Illich 1982: 12）

したがって、シャドウ・ワークには羨望や妬みによって人々を突き動かす原動力が宿っている。それでは、シャドウ・ワークによる原動力が、人々をどのように突き動かしていくのか。いまやそれは cookpad や SNS での新たなコミュニティを構築している力になっている。

cookpad による価値創造は生産や消費に新たな意味を持たせただけでなく、その価値を共有することができるようになる。SNS もコミュニケーションを通じて、生産にも消費にも属することができない行為を生み出し、さらにこの行為は共有されるものとなる。この変化によってシャドウ・ワークは産業社会下においては存在しなかったコミュニティを形成したのである。シャドウ・ワークによって、情報技術の発展とともにニーズが多様化するだけでなく、他者からの評価を得るための情報の交換や共有がコミュニティを形成する。このコミュニティは、シャドウ・

ワークの新たな展開を示唆している。次節でコミュニティが指し示すシャドウ・ワークについて、ヴァナキュラー的なものとセンチメンタリズムの側面から検討していく。

#### 4. ヴァナキュラー的なものとセンチメンタリズム

シャドウ・ワークは、「工業化時代人の住居や家庭で営まれるのは、自存的家計をなすものではない、あるいはほんのマーギナルなものでしかない」から、サブシステムとは本質的に相容れない (Illich [1980] =1981: 173)。そして、シャドウ・ワークはサブシステムを収奪するのであるが、同時に、その地位を取って代わろうとするのである。では、サブシステムに取って代わったシャドウ・ワークはどのようなものとして捉えられるであろうか。イリイチは、サブシステムにおける主体的な生存活動や創意工夫によって支えられた生活は、シャドウ・ワークにおけるヴァナキュラー的なものとセンチメンタリズムによって取って代わられたと見ていた。

本来のヴァナキュラー的なものとは、「生活のあらゆる局面に埋め込まれている互酬性の型に由来する人間の暮らし」のことである (Illich 1981: 57)。また、本来のヴァナキュラー的なものは、「ひとつの集団の内部で養われるものであり、隣りの集団ではいちおう理解されるかもしれないが、必ずしも共有されるとは限らない」ものとして、独自色を強めた小集団の固有の生活形態を指している (Illich 1981: 25)。その典型例としてイリイチが提示していたのは、特定の集団に特有の話しことば<sup>6</sup>、特定の時代の特定の集団生活に埋め込まれているジェンダー<sup>7</sup>であった。そして、イリイチは、そのようなヴァナキュラー的なものがサブシステムを支えていたと見ていた。しかし、イリイチは、ヴァナキュラー的なものやサブシステムを過去のものとして見ていただけではなく、近代においては、ヴァナキュラー的なものが擬似的な仕方でも顕在化すること、しかも、サブシステムがセンチメンタリズムを通してシャドウ・ワークに包摂される仕方でも顕在化することに注目していたのである。先行研究ではほとんど見逃されてきたこの論点を検討してみなければならない。

まずイリイチは、ヴァナキュラー的なものについては、「コンセンサスの外観を持つこと、すなわちヴァナキュラー的なものは工学的的方法論に従って設計されたリアリティに、擬似ヴァナキュラーでうわべを飾っている」と述べている (Illich 1982: 8)。人工的に作られた現実の只中に、ヴァナキュラー的なものが生じているとするのである。そのとき、ヴァナキュラー的なものは、各人にとって歴史的に所与の先天的な価値であることを止めて、あくまで後天的に獲得されるべき価値であるということになる。それによって、本来のヴァナキュラー的なものに存する特定の時代のコミュニティに制限された結界性は消失し、ヴァナキュラー的なものは開かれた世界へ開示されることになる。そこで形成される新たなコミュニティは、サブシステムの閉鎖性を脱して遍在化することになる。そして、この新たなヴァナキュラー的なコミュニティが、センチメンタリズムを引き立たせることになる。

センチメンタリズムは、産業社会のなかでイデオロギーと信仰の基層に横たわる一種の複合現象である。それは、産業社会のさまざまな活動によって破壊される諸価値こそが、まさしく産業社会自身が大事に育てているものだということを表明する。それは、いまや人間生活の自立・自存の基盤——経済成長によっていやおうなしに破壊される生活自立の基盤——に帰されるいろいろな価値が、まさしく経済成長がつづくためになくしてはならないものなのだとすることを表明する。それは、生活の自立・自存の基盤を影法師の姿へと変化させる。センチメンタリズムは、生産と消費との対立のなかで暗黙のうちに、生活の自立と自存への郷愁をあやつることによって、アパートヘイトを首尾よく処理する。(Illich 1981: 116)

引用の最後を読むと、イリイチは、センチメンタリズムを全否定しているように見える。たしかに、イリイチは、「すでに人が降伏してしまった権力にたいする儀式的な抵抗の道を提供する」だけのセンチメンタリズムを批判してもいた (Illich 1981: 116)。そうではあるが、引用から明らかなように、センチメンタリズムは、産業社会が破壊するもの (本来のヴァナキュラー的なもの、ひいてはサブシステム) を産業社会がそれなりの仕方でも保護しているということ、そしてそのことなしには産業社会が成り立たないことを表明するということを、しかもヴァナキュラー的なものは保護されながらも影法師のごときシャドウ・ワークへ変化させられるということを示す現象なのである。

たしかに、このセンチメンタリズムはアパルトヘイトを覆い隠すのだが、しかしそれが「儀式的」でない仕方で抵抗の道を開くかもしれない可能性をイリイチは否定したわけではない。むしろ、産業社会は自ら破壊した価値物を影で保護せざるをえないとセンチメンタリズムを通して告白せざるをえないところに希望を見出すこともできるのである<sup>8</sup>。とするなら、ヴァナキュラー的なものに基づくコミュニティについて、センチメンタリズム的に再考してみなければならない。

このようなコミュニティの一例にあたる cookpad や SNS は、認知資本主義との関係において、次のように捉えることができる。産業社会で破壊された本来のヴァナキュラー的なコミュニティは、認知資本主義によってヴァナキュラー的なコミュニティとして再興されるのである。したがって、センチメンタリズムにはヴァナキュラー的なものの残り香がみてとれる。ただし、センチメンタリズムは使いようによっては毒にも薬にもなる。イリイチは次のようにいう。「この社会におけるあたりまえの幸福の条件は、助けられ、救済され、または解放されなければならない者にたいしてセンチメンタルな関心をもつことである」(Illich 1981: 115-116)。イリイチは幸福の是非についていっているのではない。ヴァナキュラー的なものないセンチメンタリズムが問題だといっているのである。このことから、センチメンタリズムはヴァナキュラー的なものが伴っていなければ、幸福の追求は無意識のうちにアパルトヘイトに寄与してしまうと、イリイチは警鐘しているのである。とするなら、センチメンタリズムはヴァナキュラー的なコミュニティに紐づけることで、本来のヴァナキュラーの代替になるし、アパルトヘイトにも寄与しないことになる。よって、cookpad や SNS といったヴァナキュラー的なコミュニティから、イリイチは資本に包摂されない希望としてのシャドウ・ワークを見いだすのである。

## (注)

- 1 イヴァン・イリイチ (1926～2002) は、オーストリア、ウィーン生まれの哲学者であり、歴史家でもある。イリイチの著作から学校、病院、交通といった社会的なサービスが、専門家による権力の独占や、効率性重視を迫る近代社会システムの一助となることを明らかにした。1961年から、イリイチは CIF [Center of Intercultural Formation 異文化形成センター] (後の CIDOC [Centro Intercultural de Documentation]) なる施設 (元高級ホテルの居抜き) をメキシコのモレロス州クエルナバカに設立した。この施設はラテンアメリカと産業制度に関する研究施設として、施設が閉鎖する 1976 年まで様々な知識人たちとの交流が行われている (Hartch 2015)。
- 2 生産物が生み出されることによって常に生じる問題や不備のことである。イリイチはクルマ社会における交通事故や渋滞のストレス、学校でのいじめ、病院での医療ミスや新たな病の蔓延などを一例に挙げている。
- 3 これは新たな商品やサービスが有効なものとなる条件となっており、「はじめに」で取り上げた「逆生産性」とも関わっている。既成商品や既存のサービスに対する不備や不満が、安心・安全 (カーナビゲーションや事故防止装置、防犯装置) と満足感に紐づけられることで、新たな商品やサービスが生まれる。すなわち、生産 - 消費関係は、商品・サービスの生産と欲望の循環によって生み出され続けている。シャドウ・ワークはこの循環を促進している。
- 4 玉野井や栗原はサブシステムを「人間生活の自立と自存」と訳し、山本は「自律的な生活」とよんだ (山本 2009)。
- 5 ここでの性別役割分業に関わる論点について、立花弘志は、夫婦間の対等な贈与関係を理念型とした上で、近代家族では、夫が賃金労働で獲得した貨幣を妻に贈与し、他方で、立花は、妻は夫に対して家事の形でしか返礼できないがために、負債意識を持たざるをえなくなっているところにシャドウ・ワークの論点があるという (立花 2011)。
- 6 ヴァナキュラーな言語とは、生活圏内や共同体内部での人々との日常的な接触をとおして獲得していくインフォーマルな地域言語である。他方で、ヴァナキュラーな話しことばと対立するものが、フォーマルな言語にあたる教育で扱う公用語である。さらにいえば、公用語の普及に励む教育者をとおして習得された言語のことである。公用語は国語や教科書を通じて、教わるという特徴をもっている。グローバル化が進むにつれて、公用語の優位性は教育を介することで保証されている。
- 7 男性と女性の非対称的な性差が、相補性という形で生活への支障を互いに補い合っている。そして、非対称的な性差が、特定の時代や共同体、ならびに特定の文化的な生活を価値づけてきたのである。この性差をイリイチはヴァナキュラージェンダーとよんでいる。ちなみに、ヴァナキュラージェンダーは、社会科学の分野における社会的文化的な性のありようという意味合いではない。
- 8 『脱学校の社会』のなかでイリイチは、パンドラの箱に関する神話を引き合いに出して、箱の中に唯一残った希望について語っている (Illich [1970] 1971)。

## (文献)

- Baldwin, Bridgette, 2012, *Shadow Works and Shadow Markets: How Privatization of Welfare Services Produces an Alternative Market*, Western New England Law Review, Vol.34, 445-474.
- Fumagalli, Andrea, 2010, 「バイオ資本主義とベーシック・インカム」『現代思想』38-8: 98-109.
- 萩原弘子, 1988, 『解放への迷路——イヴァン・イリッチとはなにものか』, インパクト出版会.
- Hartch, Todd, 2015, *The Prophet of Cuernavaca: Ivan Illich and The Crisis of The West*, Oxford Univ Press.
- 一條和夫・徳岡晃一郎, 2007, 『シャドウワーク——知識創造を促す組織戦略』, 東洋経済新報社.
- Marazzi, Christian, 1999, *Il posto dei calzini: la svolta linguistica dell'economia e i suoi effetti sulla politica*, Bollati Boringhieri. (= 2009, 多賀健太郎訳『現代経済の大転換——コミュニケーションが仕事になるとき』, 青土社.)
- Negri, Antonio, and Michael Hardt, 2000, *Empire*, Harvard University Press. (=2003, 水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』, 以文社.)
- 内藤敦之, 2016, 「認知資本主義——マクロレジームとしての特徴と不安定性」山本泰三編『認知資本主義——21世紀のポリティカル・エコノミー』, ナカニシヤ出版, 29-55.
- Illich, Ivan, [1970] 1971, *Deschooling Society*, Haper & Row. (=1977, 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』, 東京創元社.)
- , 1977, *Revolting Development*, Report Magazine.
- , [1980] 1981, 「工業化時代の終末と教育」『世界』425: 164-176.
- , 1981, *Shadow Work*, Marion Boyars. (= [1982] 2006, 玉野井芳郎・栗原彬訳『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』, 岩波書店.)
- 1982, *Gender*, Marion Boyars. (= [1984] 2005, 玉野井芳郎訳『ジェンダー——女と男の世界』, 岩波書店.)
- 片岡公博, 2005, 「イヴァン・イリッチの「ニーズ」批判——「コンヴィヴィアリティの再構築」の検討」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』6: 138-149.
- 栗原彬, 2005, 『「存在の現れ」の政治——水俣病という思想』, 以文社.
- Lambert, Craig, 2015, *Shadow Work: The Unpaid, Unseen Jobs That Fill Your Day*, Counterpoint.
- Lazzarato, Maurizio, 2004, *La politica dell'evento*, Rubbettino Editore. (=2008, 村澤真保呂・中倉智徳訳『出来事のポリティクス——知-政治と新たな協働』, 洛北出版)
- Lipietz, Alain, 1989, *Choisir l'audace*, La Découverte. (=1990, 若森章孝訳『勇気ある選択——ポストフォーディズム・民主主義・エコロジー』, 藤原書店.)
- Polanyi, Karl, 1944, *The Great Transformation*, Beacon Press. (=1975, 吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美・榎原学訳『大転換』, 東洋経済新報社.)
- Sachs, Wolfgang ed., 1992, *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge As Power*, second edition, Zed Books. (=1996, 三浦清隆訳『脱「開発」の時代——現代社会を解読するキーワード辞典』, 晶文社.)
- 立花弘志, 2011, 「経済の離床を考える: イリッチの「シャドウ・ワーク」を手がかりに」『常民文化』34: 1-22.
- 上野千鶴子, 1986, 『女は世界を救えるか』, 勁草書房.
- 山本泰三, 2016a, 「序論」山本泰三編『認知資本主義——21世紀のポリティカル・エコノミー』, ナカニシヤ出版, 1-26.
- , 2016b, 「労働のゆくえ」山本泰三編『認知資本主義——21世紀のポリティカル・エコノミー』, ナカニシヤ出版, 57-82.
- 山本哲士編, 1983, 『シリーズ「プラグを抜く」1 経済セックスとジェンダー』, 新評論.
- , 2009, 『イバン・イリッチ——文明を超える「希望」の思想』, 文化科学高等研究院出版局.



## Re-evaluation of Ivan Illich's Shadow Work with the Work-Consumption's Merger in Cognitive Capitalism

YASUDA Tomohiro

### Abstract:

The form of labor has shifted in recent years from the labor in the Fordist industrial society to the labor in the cognitive capitalism of post-industrial society. Ivan Illich's shadow work has been recognized as a criticism against the industrial society. This paper argues that, in cognitive capitalism, shadow work has a possibility of creating new communities. In cognitive capitalism, the border between work and consumption action is weakened, and workers are subject to evaluation not only at their work but also in their personal life of individuals. Thus they are demanded to be subjective and forced to live an unstable life. In cognitive capitalism, people's actions create the actions different from passive consumption, for example, by participating website such as recipe sharing platform or social network service and voluntarily contributing their information. By focusing on the new kind of community built from such actions, the paper finds positive meaning on sentimentalism and pseudo-vernacular of shadow work. Thus, I argue that shadow work in the cognitive capitalism can be a positive concept different from what shadow work used to be in the industrial society.

Keywords: Ivan Illich, shadow work, cognitive capitalism, sentimentalism, pseudo-vernacular

## 認知資本主義での労働と消費の併合によるイヴァン・イリイチのシャドウ・ワークの再評価

安田 智博

### 要旨：

近年、労働形態は産業社会のフォーディズムの労働から、ポスト産業社会の認知資本主義の労働へと移行した。イヴァン・イリイチのシャドウ・ワークはこれまで、産業社会批判として評価されてきた。だが本稿では、認知資本主義においてはシャドウ・ワークが新たなコミュニティを生み出す契機でありうることを明らかにする。認知資本主義では、労働と生活の区分が弱まることから、労働者は個々人の生活を含めて評価の対象となり、つねに自発性を求められ、不安定な生活を強いられる。他方でユーザー参加型のレシピ共有サイトやソーシャルネットワークサービスを介して、消費行為とは異なる行為が顕在化する。この行為から築かれるコミュニティを、シャドウ・ワークのセンチメンタリズムとヴァナキュラー的なものから明らかにした。そして、認知資本主義におけるシャドウ・ワークは、産業社会の時とは異なり肯定的な概念となる。

